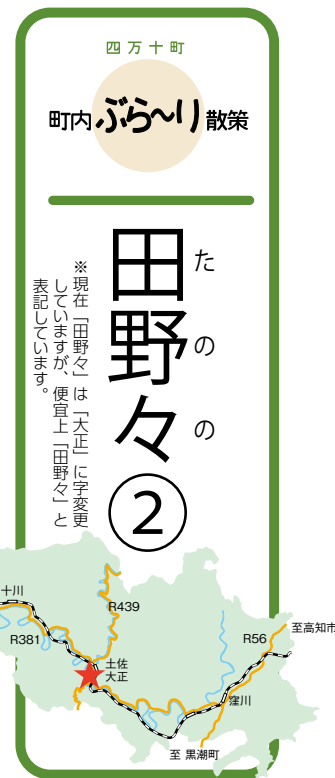




たのの 田野々々②

※現在「田野々々」は「大正」に字変更してしまいが、便宜上「田野々々」と表記してしまふ。

先月号に続いて田野々々。田野々々には神社やお寺が数多くある。

まず神社。先月号でもふれた紀州からの勧請とされる熊野神社、地区の産土神である河内神社、その礎ともいわれる皇子宮、素戔鳴尊（素戔鳴尊ニスサノオノミコト）を祀る榎木（もみのき）神社、龍王さんと呼ばれる榎見（わたつみ）神社、農業の神様とされる七夕神社、昭和30年に伊予の霊峰石鎚山から勧請したという石鎚神社、また以前は金比羅宮もあって、皇子宮に移された後、海津見神社に分祀されたと聞く。

次にお寺である。「紀州からのイターン」とも言える田那邊家については先月号で少し書いたが、その菩提寺として開かれたという五松寺、熊野神社の神宮寺としてその境内にある長楽寺、さらに、前の森林組合事務所辺りに茶堂があった。これは、大正末期か昭和初期に別の場所に移されたが、昭和23年の大火により焼失したという。その後有志によつて鉄道路脇に小さなお堂が建てられた。それからもうひとつ、櫛原川を吾川へ渡つて川沿いを少し上った道路脇に小さな小さな祠がある。耳神様という。この耳神様はその名の通り、耳の病にご利益があるとされ、祠の前には、穴の開いた小石がいくつも吊り下げられている。これは、耳の通りが良くなるようにとの願いが込められているのである。

ところでこの耳神様は熊野神社社務所裏にもある。2カ所とも昔の往還道の脇にあるのだが、吾川の祠は、田野々々と十和との出入り口にある。社務所裏の祠は瀬里との出入り口にあたる。地区の東と西の両玄関口に耳神様を置いた理由はわからない。

さて、田野々々の近代史の中で記しておかねばならないのが、昭和23年の大火災である。3月4日午後8時半頃、大正橋あたりにあった営林署機械工場から出火。当日は空気が乾燥していた。火は折からの北北東の風を何倍もの風力に変え、あつと言う間



穴の空いた石が奉納されている耳神様

に広がった。そして町の半分以上を焼き尽くし、翌5日午前4時半にようやく鎮火した。河内神社にある楓の木には、今も焦げつき痕が残っていて、大火の凄まじさを物語っている。当時の被害状況と復旧への苦労は、大正町史に詳しく記されている。

田野々々バイパスについても触れておかねばならない。田野々々の街へ向かう旧道の入口に熊野神社があつて、西へ向かう国道はそこを左へ大きく膨らみバイパスに入る。櫛原川へ張り出すように走った後「陸地」に戻る。何かを避けるように作られたこのルート。そう、樹齢千年にも届こうかという樹木たちが植生する熊野神社の鎮守の森を守っているのである。また、鎮守の森周辺にある海津見や、重要文化財の旧竹内家住宅への配慮もある。計画当初の案でも、それなりの配慮がなされていたのだが、保護にはまだ不十分ということで更なる設計の見直しが行われ、現在のルートとなったのである。

終わりに、現在の田野々々を象徴する大切な「お城」について。先月号では、中世の田野々々を象徴する三つの山城のことを書いたが、現在も田野々々には三つの城がある。田野々々小学校・大正中学校・四万十高校という「学びの城」である。中世の山城とはその目的はまったく違つが、地域の象徴であることに変わりはない。「認定こども園たのの」を含めれば、幼・小・中・高とそろっている。さすが首都・田野々々である。これら学びの城に出入りする子どもたちの声や息遣いが、首都・田野々々の今を支えているように思えてならない。

町のうごき

(5月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,616	- 3	男 4	13	19	13
女	8,308	- 6	女 2	18	19	9
計	15,924	- 9	計 6	31	38	22
世帯数	8,198	- 2	(5月中の届出)			
窪川地域 11,299人		大正地域 2,212人		十和地域 2,413人		

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	6月10日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	5.209
化学的酸素要求量	≤ 10.0	0.25

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部